

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

北アメリカ極北地域の動物と民族文化：  
アザラシとカリブー、ホッキョククジラ、犬を中心  
に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 岩波書店 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008515">http://hdl.handle.net/10502/00008515</a>

北アメリカ極北地域の動物と民族文化ーアザラシとカリブー、ホッキョククジラ、犬を中心に  
岸上伸啓

はじめに

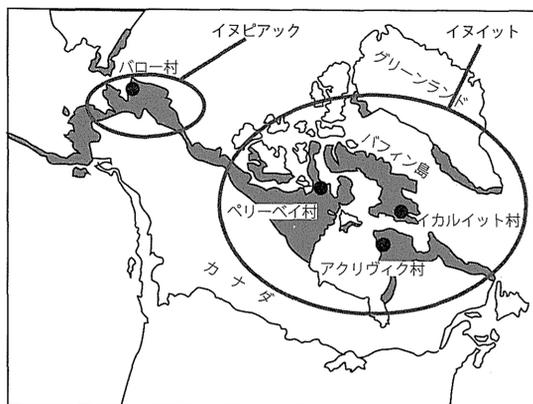


図1 イヌイトとイヌピアックの居住地域

人類と動物とのかかわり方は、地域や文化、時代によってさまざまである。北アメリカの極北地域に住む人類にとって地元の動植物を資源として活用することは、彼らの生存にとって不可欠なことであった。とくに極北地域の動物は、食料資源や衣類、道具の原材料として利用されてきた。また、犬は狩猟の補助や輸送手段として利用された。したがって、人類と極北地域に生息する動物は独特な関係を培ってきたが、この一〇〇年あまりの間に、その両者の関係は大きく変わってきた。

本節では、北アメリカの極北地域に住むイヌイトとイヌピアックを事例として、彼らと動物との関係を、極北地域の自然環境、狩猟活動、世界観との関連から描き出す。さらにその関係の歴史的な変化を跡付け、その変化について考察を加える。

イヌイトはカナダ中部極北地域からグリーンランドにかけての広大な沿岸地帯に住んでいる人々であり、イヌピアックはアラスカ北西地域に住んでいる人々である。彼らはエスキモー語を母語としているが、異なる方言を話す。彼らはエスキモーと総称されてきたが、本節では両者

を指す場合には「極北民」という名称を用いることをお断りしておきたい。

#### 北アメリカ極北地域の環境と動物

北アメリカの極北地域は、この地球上でも特異な環境を形成している。

極北地域は、高緯度に位置するため、夏季には日照時間が極端に長くなるが、冬季には日照時間が極端に短くなる。北緯六六度を越す地域では、一年のうちに一日以上太陽が地平線の下に沈まない日や地平線上に昇らない日が存在している。そこではきわめて寒く、暗く、長期間続く冬季と涼しく、明るい短い夏季が交互に出現する。

極北地域は低温低湿である。真冬には零下二〇度以下になるし、真夏でも月間平均気温が一〇度を超えることがきわめて少ない。極北地域の大地は永久凍土から形成されており、夏季に表土が解けることがあるが、地下数メートルから数百メートルにわたって一年中、凍結した状態にある。さらに、極北地域の大地は滋養分が少ないため、多様な植生は生育しないうえに、高木も存在しない。

ここで紹介した寒冷環境が形成されたのは、紀元後一一、二世紀ごろから始まった地球の寒冷化に由来する。その寒さが頂点に達したのは、紀元後一五、六世紀であるといわれている。現在では極北地域の温暖化(正確には、気候変動)が問題になっているが、つい最近まで、寒冷な気候が続いていた。極北地域は人間の生存にとってきわめて厳しい環境であるように考えられるが、多数の大型の海獣類や陸獣類、魚類、鳥類が生息している。さらにカナダガンなどの渡り鳥やクジラ類も季節的に到来し、一定の期間を過ごしている。

北アメリカの極北地域に生息する代表的な動物は、ワモンアザラシやアゴヒゲアザラシなどのアザラシ類、ホッキョククジラやシロイルカ、イッカクなどのクジラ類、セイウチ、ホッキョクグマ、カリブー、ジャコウウシ、ホッキョクウサギ、ホッキョクギツネ、カナダガン、ハクガン、ケワダガモ、ライチョウ、ホッキョクイワナ、ホワイトフイツシユ、サケ・マス類などである。

極北地域の動物は、低緯度地域の動物と比較すると、種の数が少ない一方、同種としては大型であり、一種あたりの頭数が多いことが特徴である。寒冷ツンドラ地域に生息しているため、毛皮を持つ動物や厚い脂肪部を持つ動物が多い。

## 1 極北地域における動物と人間の関係

寒冷環境への人類の適応



図2 カリブー皮製の衣類を着たハンター  
(1990年4月カナダ・ヌナフト準州ペリーベイ村)

北アメリカの極北地域に人類が進出したのは、今から四〇〇〇年以上も前のことである(デュモン一九八二・マッキー一九八二)。人類が極北地域で生きるためには、寒冷環境に適応することが不可欠であった。そして彼らが適応に成功した鍵は、彼らが生み出した生活様式、とくに独特な衣食住のスタイルであった。

現在のイヌイット文化の祖形は、紀元後一〇世紀ごろにアラスカの沿岸部で発生し、西はシベリアの北東端に位置するチュコト半島の沿岸地域から東はグリーンランドまで拡散した捕鯨を基盤とするチュール文化であるとされている。この斉一性の高い広域文化は、地球の寒冷化が進むとともに、ホッキョククジラの生息頭数が減少したために、生業基盤がアザラシやセイウチなど各地域に生息する動物植物に依存するようになった。このような過程で斉一的なチュール文化は、地域的に多様な文化へと変貌を遂げた。現在のイヌイット文化が形成されたのは、紀元後一六世紀前後である

と推定されている(デュモン一九八二、マッキー一九八二)。

歴史的に知られているイヌイットは、夏季にはアザラシ皮製のテントに住み、冬季にはイグルー(雪の家)や芝土で覆われた半地下式住居に住むことによつて寒さから身を守つた。さらに、暖房、明かり、調理のためにアザラシの脂油を燃焼させる石ランプが利用された。衣服としては、カリブーの毛皮を利用した防寒上着とズボンや、アザラシ皮製の手袋や靴が利用された。食料資源としては、地元で捕ることができる動物、とくに動物の肉を生で食べることや多量の脂肪を摂取することによつて、生存に必要なカロリーとともにビタミン類を摂取することができた。このようにイヌイットが、極北地域の寒冷環境に適応できた要因のひとつは、地元の動物を食料資源や衣類、道具を製作するための原材料として活用してきた点である。この文化的な側面は、二〇世紀半ばまで基本的には継続してきた。

#### 動物と人間の関係

イヌイットと動物との関係から動物は三つのカテゴリーに大別できる。第一に、動物はイヌイットにとつて食料資源や材料資源をえるための捕獲の対象であつた。第二に、動物の中でも犬だけは、狩猟や移動のための使役動物であり、イヌイットによつて飼育されていた。第三に、イヌイットは多くの動物種のおおのに総称名をつけ、それらの動物の習性について知っているもの、彼らが日常生活の中でほとんど活用しない動物が存在した。たとえば、第一カテゴリーの動物としてアザラシとカリブー、ホッキョククジラが、第二カテゴリーの動物として犬が、第三カテゴリーの動物としてワタリガラスやカモメがあげられる。

#### アザラシとカリブー

カナダの極北地域に住むイヌイットにとつて、アザラシとカリブーの肉や脂肪はホッキョクイワナとならびもつと



図3 ハンターと仕留めたカリブー(1986年9月カナダ・ケベック州  
ヌナヴィク地域にて)

も重要な食料資源である。さらにアザラシとカリブーの毛皮は、衣類、手袋、靴の原材料になる。

カナダの中部極北地域に住むネツリク・イヌイットは、一年を次のように一〇(イヌイット名)から一三(内容)に分けていた。それらは、「一年中でもっとも寒い時期」(qabivag、一月〜二月に対応)、「太陽の暖かさを感じ始める時期」(sivimut、三月ごろ)、「太陽が上空に長くどどまり始める時期」(kivagavik、四月はじめごろ)、「早生まれのアザラシが生まれるが死んでしまう時期」(amunvik、四月ごろ)、「アザラシの子供が生まれる時期」(nukhagav、四月〜五月ごろ)、「アザラシが白い毛を失い、黒い毛に変わる時期」(gavvik、五月ごろ、これとほぼ同じ時期を示す言葉に *norvik* という言葉がある。これは「カリブーが子供を出産し、小さな子供を持つ時期」を意味する)、「鳥が毛を失い、かつまだ卵を産んでいない時期」(ivavik、六月ごろ)、「鳥の羽が生え変わり、かつ子供を持つ時期」(kivavik、七月ごろ)、「成獣

のカリブーの枝角(袋角)の皮がはげ落ちる時期」(amivavik、九月ごろ、枝角の皮が赤みをおび充血ないし出血する。これは冬の到来をつける)、「子供のカリブーの枝角の皮がはげ落ちる時期」(amivavik、九月〜一〇月ごろ、湖の水が凍り始める時期でもある)、「貯蔵庫や土中に埋めた魚やカリブー、アザラシをとりに行く時期」(avivavik、十一月ごろ)、「日が非常に短い時期」(upivavik、一二月ごろ、この時期を「太陽がなくなってしまう時期」(sivimut)を用いる人もいる)であった(岸上一九九三a)。

ネツリク・イヌイットの伝統的な暦では、変化の指標として、寒さ、太陽の位置、アザラシや鳥、カリブーの状態、日照時間の長短などが利用されている。彼らは、身の回りの自然や動物の変化を通して、どこに移動し、どの活動をすべきかを経験的に身に付けていた。この暦からも、イヌイットとアザラシ、カリブーとの関係はきわめて深いことをうかがい知ることができる。

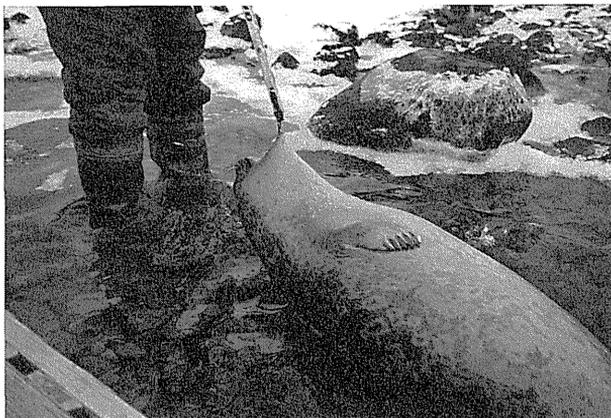


図4 捕獲したワモンアザラシ(1999年10月カナダ・ケベック州アクリヴィック村の近く)

現在のイヌイットのアザラシ猟には、おもに三種類の狩猟方法が存在している。

春季にはイヌイットは海水上で白幕盾を利用したアザラシ猟を行っている。春季になるとアザラシは海縁部の海水上でひなたぼっこをする。そして短時間の眠りと目覚めを繰り返す。ハンターは、白色の盾の後ろに身を隠しながらアザラシに近づき、射程距離に入るとライフルで仕留める。

夏季から秋季にかけては海上での船外機付きボートを利用してアザラシ猟を行っている。この狩猟は、二人一組でボートに乗り込み、ひとりが舵をとり、もうひとりがアザラシを探しながら、ボートの進行方向を指示する。そして後者がライフルを撃つ役割も務める。海や湾内で定期的に頭部を海面に出し、呼吸しながら遊泳しているアザラシに、船外機付きボートを利用して近づき、射程距離に入るとライフルで仕留める。

冬季になると海水上にアザラシが作った呼吸穴を利用した狩猟が行われている。この狩猟には、二人以上のハンターが従事する。スノーモービルで複数の呼吸穴が散在する場所に行き、一人を除くすべてのハンターは、一人ずつ各自が受け持つ呼吸穴の傍に立ち、アザラシが呼吸のためにやってくるのを待つ。残りの一人が、ハンターが見張っていない呼吸穴を回り、音を立ててアザラシを近づけさせないようにし、ハンターが待っている呼吸穴の方に行かせるように努める。ハンターが待っている呼吸穴にアザラシが鼻を出すと、ライフルを撃つてから、縄のついた回転離頭鉞を打ち込み、縄を手繰ってアザラシを氷上に引き上げる。なお、鉞を打ち込んでから、ライフルでとどめをさす場合もある。

どのような猟法であれ、アザラシを捕獲した後、狩猟場か近くの海岸で獲物を解体し、狩猟に参加したハンターの間で肉と脂肪が分配される。仕留めたハンターが毛皮をとることが多い。彼らは、村に帰ると獲物を家族や親族にも分配する。

カリブーは、冬季は南下し、夏季には北上する。八月から九月にかけては、海岸もしくは河川の近くで、一月から春季にかけては内陸において狩猟を行う。夏季には、狩猟地の近くまで船外機付きボートや四輪駆動バギーなどで行き、カリブーの群れを見つけると身を隠しながら徒歩で接近し、射程距離に入るとライフルで仕留める。冬季から春季にかけてはスノーモービルを利用して、カリブーの群れを追跡し、射程距離に入るとライフルで仕留める。仕留めたカリブーは、狩猟地で解体し、狩猟に参加したハンターの間で肉と脂肪を分配する。毛皮はカリブーを仕留めたハンターのものになる。肉の一部をその土中もしくは雪中に保存して、残りを村に持ち帰る。彼らは、村に帰ると獲物を家族や親族にも分配する。

アザラシやカリブーのような動物は、イヌイットの世界観の中ではハンターに捕られるためによく考えられている。ハンターは、目の前に現れた動物を捕獲しなければならず、獲物は敬意をもって適切に処理しなければならない。まず、獲物を独り占めすることなく必要とする人には分配しなければならない。また、適切な儀礼を行ったり、タブーを守ったりすることによって動物の靈魂を動物の主の世界に送り返さなければならない。このようにして喜んで動物の主の世界に返った靈魂は、再び動物の姿をしてハンターの前に捕られるために姿を現すとされている。人間のために自らの命を動物は投げ出すが、その命を再生させるのは人間である。このように、人間と動物の間には象徴的な相互依存関係が認められる(Gienup-Rordan 1983; スチュアート一九九一)。この死―再生は動物と人間との適切な関係が保たれるかぎり、永遠に繰り返されることになるので、この流れは相互交換(互酬性)というよりも循環であるといえる。

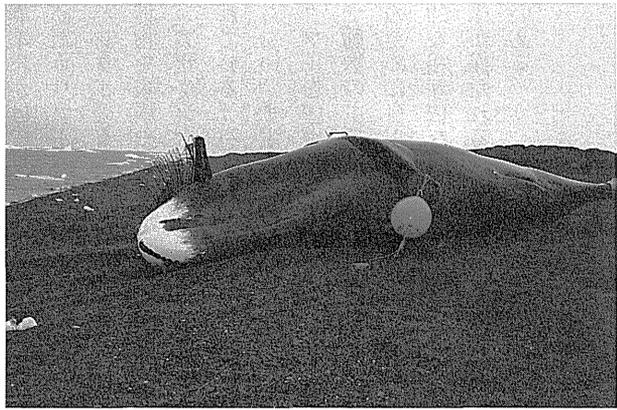


図5 捕獲したホッキョククジラ(2006年9月アメリカ・アラスカ州バロー村)

#### イヌピアックとホッキョククジラ

アラスカ北西地域のイヌピアックは、昔からホッキョククジラを捕獲してきた。ホッキョククジラの成獣の全長は平均で約一五メートル、その体重は五〇〜六〇トンである。北アメリカ西部極北地域のホッキョククジラは、夏季を北極海で過ごし、冬季をベーリング海以南の北太平洋で過ごす習性があるので、北極海とベーリング海の間を季節移動し、秋季と春季にバロー村の近くを通過する。したがって、バロー村におけるホッキョククジラ猟の時期は、例年、四月下旬から五月上旬までと九月下旬から一〇月上旬までの二つの期間に分かれている。

アラスカの北端に位置するバロー村には五五人あまりのポート・キヤプテンがいる。各キヤプテンは猟期になると五人から七人の乗組員とともに狩猟活動に従事する。春季猟の時には、キヤプテンと乗組員は海水原の際にキャンプを設営し、その近くにホッキョククジラ(以下、クジラと略称)が出現するのを二四時間体制で見張る。クジラが近くで発見されると、彼らは静かに全長五〜六メートルあまりのウミアックと見られるアゴヒゲアザラシ皮張りの大型ボートを海中にいれ、しずかにオールをこいで近づく。射程距離に入ると、銛の打ち手は、浮きが綱でつながれた銛をこめた投射銃をクジラめがけて撃ち、かつ必要ならば肩撃ち銃でとどめをさす。そのクジラがすぐに死なない場合には、追跡を始めることになる。

銛を打つときは静寂を守らなければならないし、クジラの靈魂に敬意を示すために死ぬまでは喜びの声をあげてはならないとされている。捕獲に成功すると死んだクジラのまわりを猟師たちは取り囲み、感謝の祈りをささげる。そ



図6 シロイルカのマッタック(脂肪つき皮部)の分配風景(1999年10月  
カナダ・ケベック州アクリヴィック村にて)

れから大きなボートを先頭にして縦列になってクジラをキャンプ地へと曳航していく。現在のバロー村の春季のクジラ猟では、曳航する時のみモーターボートを利用することが許されている。そして近くの海氷上にクジラを陸揚げし、解体する。

イヌピアックは秋季に村から一〇キロ以上離れた海域でクジラを捕獲するため、かなりの距離を移動しなければならぬので、人力で漕ぐウミアックではなくモーターボートを利用する。また、春季猟のようにキャンプを設営してクジラを行うのではなく、毎日、朝、村を出て、その日の夜には村に帰る。狩猟方法は同じであるが、仕留めたクジラは村はずれに曳航し、そこに陸揚げし、解体する。

クジラが捕獲されると、その肉やマッタック(脂肪つき皮部は、ボート・キャンプやボートの乗組員、引き上げや解体を手伝った人の間でルールに従って分配される。たとえば、七人の乗組員を持つボート・キャンプは、自分を含めて八人分のシェアと解体を助ける人々のために一シェア(一人分)が必要となる。

捕鯨に成功したボート・キャンプは、解体場で、その後には自宅の前に旗をたて、村人に肉やマッタックを分配する。また、ナルカタック(*narukattuk*)と呼ばれるクジラ猟期の終わりを告げるお祭り(別名、ブランケット・トス祭やクリスマス、感謝祭、使者祭(*shishisai*)などの特別な機会に祝宴を開催し、クジラの肉やマッタック、内臓を村人に提供する。クジラの肉やマッタック、内臓は、村内において売買されることはなく、無償で分配されているので、捕鯨は金銭的な意味で利益がある経済活動ではない。捕鯨や祝宴を実施するためには、ボート・キャンプは彼の大家族のメンバーから金銭的な支援を受けることが多い。また、村人は、アンカレッジやほかの村に住む家族や親族の者のところ

に肉やマツタックを、飛行機で旅行する村人に託してもってもらうことがある。クジラから取れる食料は、イヌピアックにとって価値があり、村外へも流通している(岸上二〇〇七b)。

イヌピアックの活動の大半は、捕鯨もしくはボート・キャプテンとかかわる活動であった。彼らの生活は、捕鯨を焦点として営まれていたといっても過言ではない。捕鯨はまさに、現在においてもイヌピアックの生活の基盤であり、アイデンティティーの核となる活動である。さらに、捕鯨をすること自体が彼らのエスニック・シンボルであり、彼らが先住民であることを外部に発信する政治的なシンボルであるともいえるだろう(岸上二〇〇七b)。

イヌピアックの捕鯨は、彼らの世界観と深く関係している。イヌピアックの「伝統的な」世界観では、動物も人間も靈魂を持っており、意図して行動すると考えられている。そして狩猟とは多くの点で聖なる活動である。動物と人間の関係は、相互協力と相互の尊敬であると考えられている。動物は自らの命をハンターに投げ出すが、この場合、そのハンターのみならず、彼の妻もクジラやほかの人間に対して適切な行動をとっていなければならない。ハンターの妻の方は、安らかな心を保ち、夫が取った獲物をほかの人と分かち合うことが期待されている。クジラは獲物をほかの人たちに分け与える人のところに捕獲されにやってくると考えられている。このように夫婦共々が適切な行為をしていれば、クジラは彼らがよいホストであると確信し、自らの命をハンターに投げ出すのである。イヌピアックのある古老は「私は偉大なハンターではないが、私の妻は偉大なハンターだ」と語っている(Bodenhorn 1990, 2000a)。このように、イヌピアックの捕鯨ではハンターの妻(特に、ボート・キャプテンの妻)が象徴的であるが重要な役割を担っている(Bodenhorn 1990, 2000a, 2000b: 136)。

また、アラスカのイヌピアック社会においては、ナルカタック祭、感謝祭、クリスマスは寛大な贈り物としてのクジラに対して彼ら自身のやり方で感謝を表す重要な機会である。また、宴会や歌、踊りでクジラを祝う機会でもある。このような機会にクジラの肉など伝統食を分かち合いながら食べることは、イヌピアックであることのアイデンティティーやコミュニティ意識を生み出す機会となっている(Bodenhorn 2000b: 137; 岸上二〇〇七a)。

## イヌイットと犬

極北の地に住むイヌイットにとつて、犬は唯一の家畜であり、使役動物であつた。動物の中で生死もふくめ、犬はイヌイットの完全な支配下にある唯一の動物であつた。犬は動物の中で唯一、個体ごとに個別の名前をもつ動物であり、イヌイットが人間の名前を犬につけることもあつた(一)。

犬糧を使えば、氷原を一日に二〇キロ以上進むことができた。夏季には荷物を犬に背負わせて、運ばせることもあつた。また、獲物が見つからない場合や悪天候のために食料がなくなると、犬を急場しのぎに食べることもあつた。犬は嗅覚がすぐれているために、海水上にあるアザラシの呼吸穴や巣穴を発見したり、危険なホツキョクグマが近くにいることを知らせたりすることにも利用された。このように犬はイヌイットの狩猟生活には必要不可欠な存在であつた。よいリーダー犬は、ハンターの狩猟のパートナーとして大事にされていた。

犬はおもに冬季に利用される動物であつたので、夏季には離れ小島に置き去りにし、定期的にエサを与えることが多かつたが、海が氷結し、海水原が形成され陸とつながると、イヌイットのキャンプに勝手に帰ってくる犬もいた。夏季には、二日に一度程度しかエサをやらないが、冬季や春季に狩猟や旅に出る前には、多量のエサを犬に与えた。また、強い犬を作り出すために、犬のメスとオオカミのオスを意図的に交配させることもあつた。

犬は説話の中でも特異な位置を占めている。「犬と結婚した女性」という説話の中では、犬は海の女神ヌリアユク(セドナ)の夫であり、インディアアンや白人の祖先であるという位置づけが与えられ、女神が住む海底の屋敷の門番であるとされている(岸上一九九三b)。

狩猟の成果や移動は自らの生存と直接かかわるため、イヌイットは糧を引く犬を厳しく訓練し、あまやかすことなく接してきた。たとえば、所有者の命令に従わない犬は半殺しの制裁を加えられることがあつた(本多一九七二:六五―八二)。また、リーダー犬や人間の名前を付けられた犬以外の犬が死んでも、イヌイットはあまり嘆き悲しむことはない。南からやってきた欧米人の目にはイヌイットが犬を不当に手荒く取り扱っているように見えたため、イギリ

スの愛犬家団体は、一九六〇年代に「イヌイットは犬を虐待している」とマスコミを通じて世界に訴えたことさえある。このように欧米社会と比べた場合、動物との接し方には大きな差異が見られる。

#### 精神世界における極北地域の動物

極北地域に生息するホッキョクネズミ、ワタリガラス、カモメ、ユキホオジロ、キョクアジサシなどのような動物にイヌイットは名前をつけているが、日常生活の中でほとんど利用しないような動物が存在している。しかしイヌイットをはじめとする極北民と彼らが利用しない動物の間になんか関係がないかといえば、そうではなく、神話や精神世界の中では象徴的な関係を持つている。

その中には、極北民の神話や昔話に出てくる動物が存在している。そのひとつが、ワタリガラスである。アラスカ先住民の説話の中ではワタリガラスがこの世界を作り出した動物として出てくる(宮岡一九八七二三五一四〇)。

ワタリガラスを創世動物とする神話は、西はカムチャツカ半島から東はベーリング海峡を越え、アラスカ沿岸地域、さらには北アメリカ北西海岸地域にいたる北太平洋沿岸地域に分布している。このことから、アラスカの先住民や北アメリカ北西海岸先住民は、アジア側の先住民グループと歴史的なつながりがあることが推測されている。一方、カナダやグリーンランドのイヌイットの創世神話にはワタリガラスは出てこないが、善悪の両面をもつトリックスター的な存在として説話の中に出てくる。

北アメリカの極北民は、すべての生物は靈魂(アラスカでは「イヌア」、カナダ側では「ターニック」と呼ばれる)を持つており、靈魂のレベルではすべての生物は同じものである。外面的な姿を相互に変身することができるという考え方をもっていた(2)。アザラシもホッキョクグマも毛皮を脱ぐと人間と同じであり、人間と同じような社会を形成して生活を営んでいると信じていた。かつて強力なシャーマンが、ウミツバメに変身し、遠くを旅行した話や不猟の時にホッキョクグマに変身し、アザラシを捕りにいった、というような話が残っている。

このように極北地域における人間と動物の関係から動物を分類してみると、資源として利用する捕獲対象動物、使役動物、ほとんど利用しない動物の三つのカテゴリーに分類できる。極北民の場合には、ほぼすべての動物は精神世界において象徴的に人間と深い関係が認められる。一方、使役動物である犬は人間に完全に支配される唯一の動物であり、かつ個別の名前を持つなど、動物であるがほかの動物とは大きく異なる特徴を持っている。

## 2 極北地域における動物と人間の変容

北アメリカの極北地域において動物と人間の関係は、欧米人との接触、キリスト教の受容、イヌイットの定住化、狩猟装備の機械化などによって変容していく。次に、どのような変化が起こったかを紹介する。

### 定住化と狩猟装備の機械化の影響

第二次世界大戦が終結すると米ソ冷戦の時代に突入した。その時からソ連が崩壊し、新生ロシアが誕生するまでの間、東西に広がる北アメリカ極北地域は軍事戦略上、重要な地域となった。一九六〇年代までにグリーンランドからアラスカに至る各地に早期警戒レーダー基地が設置され、極北地域に散在していたイヌイットやイヌピアックらは、拠点となる村落への定住化をなかば強要され、教育や行政サービスの分野で国民化(同化)政策が実行された。この時期には、貨幣経済がイヌイット社会に浸透し、生産手段である犬橇やカヤックは、スノーモービルや船外機付きボートに取って代わられた。イヌイットが定住村落の中で大半の時間を過ごすようになったので、ツンドラや海氷上で過ごす時間が減少して行った。とくに、女性、子供たち、老人たちが村外で過ごす時間が減少したため、自然環境やそこに生息する動物との関係が徐々に薄くなってきた。

スノーモービルが普及すると、政府の指導で定住地での不要な犬を抹殺する地域もあった。また、犬の疫病が蔓延し、一挙に犬を失った村もあった。いずれにせよ一九六〇年代に入ると、狩猟用のイヌイット犬の数は激減した。一方、狩猟漁撈活動には、スノーモービルらの新技術が導入され、狩猟漁撈の効率は向上したが、イヌイットのハンターと捕獲動物との多面的な関係は持続していた。

イヌイットやイヌピアックら極北民は遅くとも二〇世紀半ばまでにキリスト教に改宗していた。キリスト教の受容は、極北民と動物の関係にも影響を及ぼした。かつては動物の主や靈魂が、動物をイヌイットやイヌピアックに捕獲されるために遣わすと考えられていたが、現在では、キリスト教の神が食料となる動物を彼らに遣わすのだと考えるようになってきている。したがって現在では、猟の成功に対する感謝やお祈りは、キリスト教の神に対してなされるようになった。

#### 国内外の法的な規制と動物愛護運動、資源開発による諸影響

イヌイットと捕獲動物の関係は一九七〇年代から一九九〇年代にかけてさらに変わっていった。アメリカにおいて、セイウチ保護法（一九四二）やオットセイ保護法（一九六六）などが施行されていたが、一九七二年には海獣保護法が、そしてその翌年には絶滅危機動物保護法が制定された。これ以外にも渡り鳥条約などが締結された。

さらに一九七七年には国際捕鯨委員会がアラスカ先住民によるホッキョククジラ鯨の禁止を提案した。交渉の結果、禁止はされなかったが、一九七九年から一年当たりの捕獲頭数に上限が設定されるようになり、アラスカ先住民の捕鯨に大きな変化をもたらした。たとえば、クジラ鯨は、大家族集団がポートクルーの単位であったが、より多くの村人に平等にクジラの肉が行き渡るように、異なる大家族集団に属するメンバーからポートクルーをリクルートし、狩猟するようになった。また、各ポートが公平なチャンスで捕鯨に従事できるようにルールを作り、実施するようになった(Bodenhorn 2000b: 144)。この事例が物語るように、アメリカやカナダにおける狩猟獣に対する法的な捕獲規制

はさまざまな社会変化を生み出している。

一九八三年にはヨーロッパ共同体が、動物愛護団体の主張に同調し、アザラシの毛皮やアザラシ皮製品のヨーロッパ共同体への輸出入の禁止を決定した。この結果、アザラシの毛皮が売れなくなったために、イヌイットやイヌピアックの人々は現金収入源をひとつ失ってしまった。これがイヌイット社会に大きな経済的および社会的な問題を引き起こした(Wenzel 1991)。

ヨーロッパや北アメリカにおける動物愛護運動は、イヌイットらのアザラシ猟の衰退をもたらした。一九六〇年ごろからイヌイットは、アザラシの毛皮を売り、その儲けでガソリンやライフルの銃弾を購入し、狩猟漁撈を続けていた。とくにアザラシ猟は、現金収入源になるうえに、肉や脂肪は食料資源となる。さらに獲物の社会内での分配は、イヌイットの社会関係の維持、再生産を生み出していた。同時期にホッキョクギツネの毛皮の価格も停滞していたため、毛皮交易からは現金を入手することが難しくなった。この結果、ガソリンや銃弾を満足に購入できないハンターは狩猟漁撈に行くことができなくなったために、村に持ち込まれる肉や脂肪の量が激減した。これは、イヌイットの食料難を意味し、十分な栄養分がとれなくなると健康問題を引き起こすことになった。さらに、分配する肉や脂肪の絶対量が減少したため、分配の頻度が減り、社会関係にも変化が現れ始めた。このように外部社会での政治経済的な決定が、イヌイットの狩猟漁撈活動、食糧問題、社会関係に負の影響を及ぼしてしまつたのである(Wenzel 1991)。

時期は相前後するが、一九六九年にアラスカのプルドー湾で巨大な石油埋蔵地が発見され、一九七〇年代後半に多国籍企業によって大規模な油田開発が実施された。ほぼ同じ時期にカナダのマッケンジー河デルタ地帯において石油や天然ガスの開発やそれに伴うパイプラインの建設が提案された。これらの開発は、海洋汚染やクジラやカリブーの移動ルートに影響を与える懸念が出た。二〇〇八年にはエッソら巨大な石油企業がバロー村に近い北極海で海底油田の探索調査を開始した。近海での油田開発に関係する多数の船舶の航行や調査活動は、クジラの回遊ルートを変更させたり、健康状態に悪影響を与えたりする恐れがあると考えられている。

一九六〇年代以降、極北地域社会における市場経済の浸透や空輸網の発展によりアメリカ本土やカナダ南部で生

産・加工された食料品が大量にイヌイット社会やイヌピアック社会に流入するようになった。これらの結果、極北民の食事の内容にも変化が見られた。とくに、若者層の中には伝統食よりもハンバーガーやスパゲティーを好む人も増加してきた。また、現金があれば食料を購入することができるようになった。現在でも、地元で捕れる魚類や鳥類、陸獣・海獣の肉は極北民にとっては「真の食べ物」であり、文化的に価値が高い食料であるが、カロリー摂取量から見ると、地元の食料資源の割合が低下してきている(岸上二〇〇五、二〇〇七a)。

同様に一九六〇年代に入ると、カナダ南部やアメリカで製造された衣類が極北民の間に恒常的に商業流通するようになった。冬季に狩猟に出るハンターを除けば、村で過ごす時間が多くなったイヌイットの日常衣は毛皮製から布製や化纤製へと取って代わられた。このため、衣類を製作するために必要なカリブーやアザラシの毛皮を確保する必要性が急激に低下した。

極端な言い方をすれば、地元で捕れる動植物は文化的に評価の高い食料資源であるが、現在の極北民の身体的な生存にとって不可欠な食料資源ではなくなりつつある。同様にカリブーやアザラシの毛皮も日常着を製作するうえで不可欠の素材ではなくなった。この利用のための必要性の低下は、狩猟対象獣や捕獲頭数、捕獲活動などの変化を通して極北民と特定の動物の関係を変化させてきたといえるだろう。このようにさまざまな要因のために、極北民にとって生存の中核を形成していた人間と動物との関係が変化してきたのである。

### グローバル化の影響とペット動物の出現

さらにイヌイット社会の経済構造の変化やグローバル化の進展などにより、動物とイヌイットの関係は変化していった。一九七〇年代ごろから現金経済の重要性がますます大きくなり、かつては生業活動が主で、賃金労働が従であった混交経済から賃金労働が主で、生業活動が従である混交経済へと変化してきた。言い換えれば、大多数のイヌイットが村の中で賃金労働の職につくことを望み、村内でほとんどの時間を過ごすようになってしまった。このような



図7 ホッキョクグマ(2007年8月カナダ・ヌナウト準州/バフィン島: Bob Mesher 撮影)

社会経済的な変化とともに動物と人間の関係も変化してきた。

一九八〇年代に入ると、イヌイットが犬をペットとして飼ったり、犬種競技用やエコツアーリズム(観光業用に犬を育てたりするようになった。このため一九六〇年代には激減していた犬が徐々に増加した。また、近年、グリーンランド北西部のシオラパルク村のように狩猟用の犬種を意図的に復活させている地域もある。この半世紀の間に、イヌイット社会では犬は使役動物から愛玩動物やそれ以外の目的に利用する動物へと変容を遂げてきた。さらに極北地域での数少ないビジネス・チャンスを生かすために、シロイルカやホッキョクグマ、野鳥の観察を中心とするエコツアーリズムを始めるイヌイットも出現した。また、カナダ南部やアメリカ本土からやつてくるスポーツ(トロフィー)・ハンターのガイドとして働くイヌイットも増加している。彼らにとって極北の野生動物は

生業狩猟の対象ではなく、現金収入源の対象となっている。

それから一〇年がたった一九九〇年代後半には、イヌイットの中にペット犬のほかに、猫や小鳥、さらに金魚や熱帯魚、亀を飼う人が増え始めた。これらのペット動物のほとんどは、カナダ南部から搬送され、現金を媒介にして購入された動物である。村の中の仕事が原因でストレスをためているイヌイットやイヌピアックの人々は、心の安らぎと癒しを求めて多様な愛玩動物を飼育するようになったのである。

#### 環境汚染と地球温暖化の影響

捕獲動物と人間との関係も、環境汚染や地球の温暖化などによる

影響を受けてきた。

極北地域における環境汚染とは、PCBやDDTのような残留性有機汚染物質による自然環境およびそこに生息する海獣類や魚類の汚染問題である。PCBやDDTは自然には存在し得ない化学合成物質であるが、これまでの研究によると前者は海流や気流によって、後者は気流によって低緯度および中緯度地域から極北地域に運ばれたと考えられている(岸上二〇〇二)。食物連鎖を通して汚染物質がアザラシやホッキョクグジャなど海獣の脂肪に蓄積され、それを食べたイヌイットの健康を害する恐れがあることが環境科学者や医学者によって指摘された。このためカナダ政府はイヌイットの妊婦に海獣の脂肪を食べることを制限するように勧告したり、イヌイットに脂肪分の過剰摂取には気をつけるように勧告したりしている。

また、近年、奇形の動物が捕獲される確率が高くなってきた。イヌイットの間には、政府の指摘する環境汚染やイヌイットが遺棄してきたゴミによる環境汚染と奇形動物の発生を因果的に結びつける者も出てきている。このような結果、イヌイットの中にはアザラシなどを食べることを差し控える者や村落の近くでは動物や魚類を捕獲しないなど食事や狩猟の行動に変化が現れてきた。この変化は、間接的にせよ、獲物である動物とイヌイットの関係を変容させているといえよう。

さらに、極北地域において人間と動物の関係を変容させる要因として、近年、顕在化してきた温暖化の問題が存在している。地球温暖化は、極北地域における平均気温の上昇をもたらしたのみならず、予測不可能な気候の変化をもたらし、とくに気温の上昇は、海水原の形成を妨げたり、解氷の時期を早めたりした。この結果、たとえば、本来ならばホッキョクグマが海水上の巣穴の中で子育てをすべき時期に、海水が融け、子供を育てることができないう事象が発生している。また、エサ場である海水原が少なくなり、飢餓状態に陥るホッキョクグマも出現している。その生息域は狭まり、生息頭数が減少していると考えられている。このため二〇〇八年五月にはアメリカ政府はホッキョクグマを「絶滅危惧種」に指定した。このような状況が持続すれば、極北民の生業狩猟にさらなる制限が加えられることになる。また、温暖化の影響によってホッキョクグジャやシロイルカの回遊ルートや移動の時期に変化が見

られたつある。

温暖化の影響を受けて、イヌイットのハンターがスノーモービルを利用することができる期間や地理的な範囲が狭まってきている。このような変化のために、以前と比べるとイヌイットが海獣類を海氷上から捕獲することが困難になってきている。

二〇〇八年現在では、環境汚染の問題も危機的なほど深刻ではなく、また気候変動の諸影響も対処できる範囲にとどまっている。しかし、環境汚染や気候変動は、歴史的に培ってきたイヌイットの環境知識では、問題を抜本的に解決することができないため、この状況が長期化すると、食事や狩猟行動が変化せざるを得なくなり、獲物(食料資源)としての動物とイヌイットの関係を大きく変容させる可能性を秘めているといえよう。さらに、イヌイットの狩猟活動は、彼らの食料資源の確保、社会関係、「伝統的」な知識、世界観、アイデンティティーの維持などと深くかわっているため、狩猟対象動物の減少や変化およびそれにもなう狩猟漁撈活動の変化は、イヌイットと動物の関係のみならず、イヌイットの生活の諸局面に大きな変化をもたらすと予想することができる(岸上二〇〇八)。

### 3 変わり行く極北地域の動物と民族文化

本節では、北アメリカの極北地域における人間と動物の関係を紹介したが、この一〇〇年あまりの間でその関係は急激に大きく変わってきたといえるだろう。

人類が極北地域に進出したのは今から四〇〇〇年前であったが、現在のイヌイット文化の原型が完成したのは、寒冷化が進んだ一六世紀ごろであった。イヌイットやイヌピアックは、極北環境の中で生き抜くためには、各地域で入手できる動植物を最大限に活用することが必要であった。そのような中で、アザラシやカリブー、ホッキョクイワナ、ホッキョククジラは、極北民の食料であり、衣類や道具の原材料となる重要な資源であった。極北民と多くの動物の関係は、おもに狩猟漁撈活動を通して結びつき、独特の世界観に反映されていた。さらに犬は狩猟活動や移動のため

の使役動物であり、唯一の家畜であった。このため、極北民と犬の間には、特殊な関係が形成されていた。

この時期に形成されていた動物と極北民の関係は、おもに三種類に分類することができた。第一の関係は、狩猟漁撈する人間と捕獲される動物の関係であった。第二の関係は、人間と使役(家畜)動物の関係であった。第三の関係は、人間が認知しているが、日常的に利用することがない動物との非実用的な関係であった。

この極北民と動物の関係は、二〇世紀に入り、極北民が毛皮交易に参加したことやキリスト教に改宗したこと、定住化したこと、先住民政策の実施、飛行機や貨物船など大量運搬手段の利用、狩猟や運搬において新技術を導入したこと、イヌイットの社会経済構造が変化したこと、動物愛護運動の国際的な展開、動物の捕獲についてさまざまな規制が課されたこと、石油や天然ガスの開発、温暖化、環境汚染、経済や文化のグローバル化などさまざまな要因が複合的に作用し、多様化していった。

一九六〇年代以降は生存資源として利用するための捕獲対象動物や使役動物以外に、イヌイットは、カナダ南部地域から持ち込まれた観賞用金魚や小鳥、ネコ、犬などのペット動物を持つようになった。また、ホッキョクグマやシロイルカ、さまざまな野鳥を捕獲の対象ではなく、エコツーリズム用の観光資源として利用し始めている。また、捕獲規制や温暖化の進行によって、ホッキョクグマ、シロイルカ、ホッキョククジラなどは希少な食料資源となりつつある。その一方で、海獣の脂肪が極北民の健康を害する恐れが指摘されており、イヌイットの一部は意図的に食べる量を減らしたり、食べるのをやめたりし始めている。

これまでの生業狩猟を介した極北民の動物との関係は、多様化し始めている。さらに、カナダ国家の先住民支援やイヌイットの社会経済構造や嗜好の変化によって、カロリーの点からみれば地元で捕獲できる動物が極北先住民の生存にとって絶対不可欠であるとはいえなくなりつつある。さらに、職業志向の変化により、生業狩猟の頻度や内容が変化しつつある(岸上二〇〇七a)。この生業狩猟の変化は、極北民と動物の関係をよりいっそう変容させていくと考えられる。生業活動を通して人間と動物が緊密に関係してきた極北地域における動物と人間の関係の変化は、極北民文化の歴史的な変化を反映し、象徴しているといえるだろう(3)。

- (1) イヌイット社会などの極北民社会では、人名には特定の個性や性質、技量をもつ靈魂が宿つていると考えられている。死者の名前や祖父の名前の生まれない場合には、一時的に死者の名前をつけることがで きる新生児がいなくなる場合には、一時的に死者の名前を飼犬につけ、 名前がこの世からなくならないようにすることがあった(岸上 一九九七)。
- (2) イヌア(信仰)については、宮岡(一九八七:四四―四六)を読みたい。
- (3) 現時点では、生業狩猟や地元で捕獲された食料はカナダ・イヌイット やイヌピアックにとって社会・経済・政治・文化的に重要であり続け ているため(岸上 二〇〇五、二〇〇七a、二〇〇七b、二〇〇八)、生業狩猟を通 して形成される動物と極北民の関係は変化しつつも、再生産され続け ている点を強調しておきたい。

参考文献

岸上伸啓 一九九三a 「生活時間を通してみるカナダ・イヌイット社会の 変化について」岡田宏明編『平成四年度科研成果報告書―環極北文化の 比較研究』北海道大学文学部

一九九三b 「カナダ・イヌイットの精神世界における動物」『北 海道教育大学紀要 第一部B社会科学編』四四巻一号: 一―二二

一九九九「カナダ・イヌイットの個人名と命名」上野和男・森 謙二編『名前と社会―名づけの家族史』早稲田大学出版部: 二五―二 二七

二〇〇二「カナダ極北地域における海洋資源の汚染問題―そ の現状と文化人類学者の役割」『国立民族学博物館研究報告』二七巻二 号: 二二七―二二八

二〇〇五「カナダ極北の先住民族イヌイット」岸上伸啓編『極 北世界の食文化』農文協: 二二―二五九

二〇〇七a 「カナダ・イヌイットの食文化と社会変化」世界思 想社

二〇〇七b 「クジラ資源はだれのものか―アラスカ北西部に おける先住民捕鯨をめぐるポリイティカル・エコノミー」秋道智彌編『資 源とコモンズ』資源人類学 第八巻 弘文堂: 一一五―一二六

二〇〇八「文化人類学的生業論―極北地域の先住民による狩 猟漁撿採集活動を中心に」『国立民族学博物館研究報告』三三巻四号: 五二―五七八

スチュアート、ヘンリ 一九九一「食料分配における男女の役割分担につ いて」『社会人類学年報』一七号: 一一五―一二七

デュモン、ドン・E. 一九八二(小谷朝聖訳)『ソンドラの古代人』学生社

マツギー、ロバート 一九八二(スチュアート、ヘンリ訳)『ソンドラの考古学 ―カナダ・エスキモアの古代文化』雄山閣

宮岡伯人 一九八七『エスキモア極北の文化誌』(岩波新書)岩波書店

本多勝一 一九七二『カナダ・エスキモア』(講談社文庫)講談社

Bodenhorn, Barbara 1990, "I'm Not the Great Hunter, My Wife Is. Inupiat and Anthropological Models of Gender." *Etnos/Inuit Studies* 14(1/2): 55-74

2000a, "It's Good to Know Who Your Relatives Are But We Were Taught to Share with Everybody: Shares and Sharing among Inupiat Households." in G. H. Wenzel et al. eds. *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers*. *Senri Ethnological Studies* No. 53. National Museum of Ethnology

2000b, "The Inupiat of Alaska." in Milton M. R. Freeman ed., *Endangered Peoples of the Arctic*. Greenwood Press

Finup-Rorand, Ann 1983, *The Nelson Island Eskimo*. Alaska Pacific University Press

Wenzel, George 1991, *Animal Rights, Human Rights: Ecology, Economy and Ideology in the Canadian Arctic*. University of Toronto Press